

# 伝統芸 パリで広める

大阪市在住の和泉流狂言師・小笠原匡が、パリで、日本の伝統芸を紹介する講座の案内役を務めている。パリ日本文化会館主催の「伝統の継承」プログラムで、能楽、文楽、歌舞伎、雅楽などジャンルは多岐にわたる。小笠原は「本物の伝統芸能に触れてもらい、日本への理解も深まれば」と話している。

(倉岡明菜)

## 小笠原匡が実演・体験講座

小笠原は、1983年に八世野村万蔵(1959〜2004)に入門。人間国宝・野村萬門として、関西を拠点に活動しながら、文楽や平家琵琶、イタリアの仮面劇「コシメタイア・テッラルテ」など、異ジャンルとの融合も模索してきた。

91年にパリで開催したワークショップに参加。「パリに

根付く一流の芸術・文化に触れることは、狂言にとどまらず、表現者として芸の幅を広げる」と実感し、「息子はパリで学ばせたい」と、2014年9月から、長男・弘晃をパリの公立中学校に進学させた。

長男と妻が暮らすパリと日本を往復する生活が始まり、パリ日本文化会館の依頼を受



パリから一時帰国した長男・弘晃(手前)に稽古をつける小笠原匡=里見研撮影

## 現地留学の息子もサポート

け、今年1月から「伝統の継承」プログラムを手がけることになった。講義、実演、体験を通して、現地の人たちに伝統芸を学んでもらう企画。

5月には、文楽人形遣いの吉田玉佳、玉翔、玉路を招き、文楽の歴史紹介や、人形遣い体験を行った。参加者は人形の操作に悪戦苦闘しながら、「貴重な体験だ」と喜んでいったという。今月4〜6日には能楽の囃子の実演や、狂言体験を行った。

講座で父をサポートする弘晃は「『クールジャパン』と言われる漫画やアニメなどの日本文化には関心が高い。伝統芸能という素晴らしい文化があることも伝えたい。まず、友人たちに狂言を見てもらうことから始めるつもり」と話している。

「息子には将来、日本とパリの橋渡しをしてほしい」と願う小笠原は「日本では狂言は言葉が難しい、敷居が高いと敬遠されがち。言語が異なるパリでは、音やリズムの美しさを純粋に楽しんでもらえる。伝統芸能の魅力を多角的に伝えたい」と抱負を語った。



文楽人形の操作を体験するパリの参加者たち